キャラクター名
ニケ・エフェソス

プレイヤー名

メインクラス	シーフ	**Lv.1:**		**レベル**	3
サポートクラス	ニンジャ	**Lv.1:**	アルケミスト	**性別**	女
称号クラス				**年齢**	わかい(多分18くらい)
種族	ネヴァーフ			**境遇**	紛失
出自（効果）	王侯貴族			**目標**	友情

	筋力	**器用**	**敏捷**	**知力**	**感知**	**精神**	**幸運**
基本値	10	21	9	8	12	8	6
ボーナス	3	7	3	2	4	2	2
クラス修正	0	2	2	1	1	0	0
他修正							
能力値	3	9	5	3	5	2	2

HP	44
MP	42
フェイト	5

装備品		**射程**	**命中**	**攻撃**	**回避**	**物防**	**魔防**	**行動**	**移動**
右手	ウェポンクリエイト		0	17				0	
左手									
頭部	ハット					1			
胴部	レザーアーマー					5			-1
補助	バックラー					2			-1
装身具	手入れ道具								
能力値			9	0	5	0	2	10	8
スキル			1						
その他									
総計(右)			10	17	5	8	2	10	6 m
総計(左)			10	0					
総計(両)									
ダイス数			3 d	2 d	2 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	5			5	+ 3 d
トラップ解除	9			9	+ 2 d
危険感知	5			5	+ 2 d
エネミー識別	3			3	+ 2 d
アイテム鑑定	3			3	+ 2 d
魔術判定					+ d
呪歌判定					+ d
錬金術判定					+ d

所持品	
冒険者セット	MPポーション
バックパック	MPポーション
毒消し	MPポーション
毒消し	MPポーション
ベルトポーチ	
MPポーション	
MPポーション	
MPポーション	
MPポーション	
MPポーション	
MPポーション	

現在重量： 17		
最大重量： 17	所持金： 125	預金・借金：

スキル名	**SL**	**コスト**	**タイミング**	**射程**	**対象**	**判定**	**制限**	**メモ**
テクニックマスター	★	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果： 器用基本値+3								
ワイドアタック	1	4	メジャー	武器	範囲(選択)	命中		
効果： 武器攻撃を行う。2体以上を対象に取ったらダメージ+[SLx2]								
インタラプト	1	-	効果参照	視界	単体	-	シナリオ1回	
効果： スキルの使用に対し、打消し								
アームズマスタリー：短剣	1	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果： 命中+1D								
ウェポンクリエイト	4	7	マイナー	-	自身	錬金術		
効果： 武器生成(装備欄)								
ストライクスロー	2	-	パッシヴ	-	自身	-		
効果： 投射のダメ+8、射程+10m(計算済み)								
ウェポンシュート	1	5	メジャー	30m	単体	命中		
効果： 投射による武器攻撃。武器の攻撃力2倍、攻撃後に破壊								
ファインドトラップ	1	-	パッシヴ	-	自身	-	-	
効果： トラップ探知+1D								
ヒストリー	1	-	パッシヴ	-	自身	-	-	
効果： 知力+1D（様々な国や街の概要、歴史、人物を知っているか）								
トレーニング：器用	1	-	パッシヴ	-	自身	-	-	
効果： 器用基本値+3								
フェイス：アーケンラーヴ	1	-	パッシヴ	-	自身	-	-	
効果： あらゆる攻撃の命中判定+1								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

私は、そこらに落ちている石を、鋼の刃に変えてしまう。
私は幼いころから錬金術を仕込まれた。
錬金術にも様々あるが、私の家系のものは、物質を変容させる類のものだ。
そういった技術を伝える私の家は、錬金術師には有名な一門だった。
というのも、私の家は、怪しげな暗殺一族と仲睦まじく手を繋いでいるのだ。
ナイフを作り出す錬金術は暗殺術と相性が良く、代々、ふたつの家は深く交流してきた。
私は、そんな名門に生まれた。

暗殺一族と言ったもののそれは遠い昔の話で、今ではその多彩な戦闘術を操り、街の平和に一役買っている一族だ。
とはいえ、戦闘服が黒装束なので、どうにも奇妙に見られてしまっている。
そんな一族に、私と同い年の、ヴァーナの女の子がいた。
彼女は気が弱く、とても戦闘に向いてはいなかった。
しかし、後継ぎがいなかったらしく、彼女は強がって、技を継ぐ決心をしていた。
それは、私と同じだった。
私と彼女はすぐに仲良くなった。同じ境遇の苦労を分かり合える、友達になった。
ある時はお互いの技を見せ合い、ある時はそれを教えあったりもした。当然、習得なんてできなかった。
度々、彼女は私を羨んだ。
彼女によれば、錬金術は戦闘向きで、なにより私の方が気丈なのだと。
それは間違いだった。
私は私の継ぐ錬金術が嫌いだった。どこからともなく凶器をこしらえる術は、確かに戦闘向きかもしれないが、危機の遠い日常を生きる私にとっては、私自身こそが恐ろしかった。決して気丈などではなかった。
私たちは、鏡も同然だった。